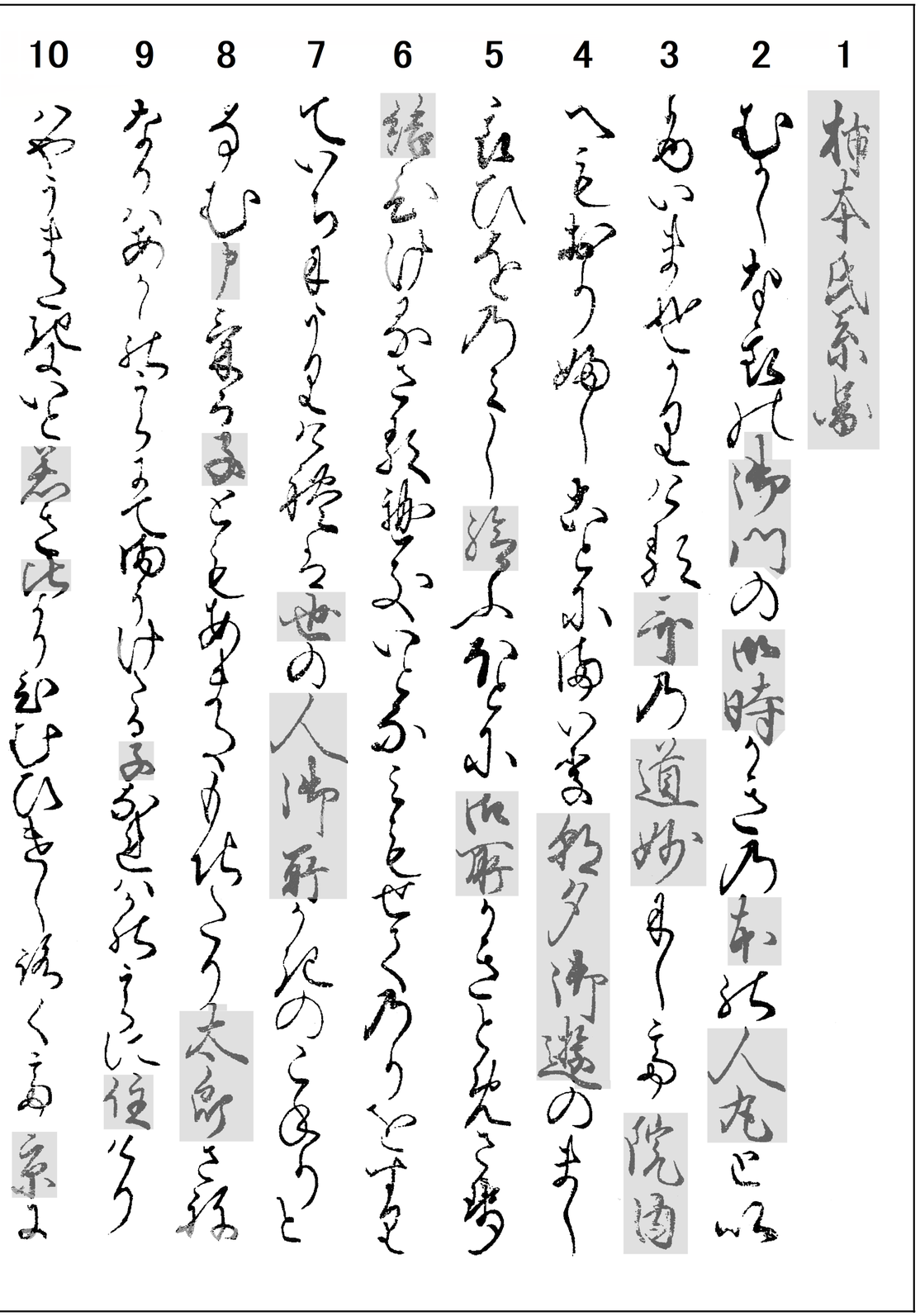


1 柿本氏系図

2 むかしならの御門の御時かきの本の人丸とい
むかし（昔）、なら（奈良）の御門の御時、かき（柿）の本の人丸とい

3 ふいまそかりける哥の道妙にして院内
ふいまそかりける。哥（＝歌）の道妙にして、院内

4 へもおりふしことにまいり朝夕御遊のまし
へもおりふし（折節）ごとにまい（参）り、朝夕御遊のまじ

5 らひをのみし給ふほとに御所かきとめさせ
らひをのみし給ふほどに、御所がき（柿）とめ（召）させ

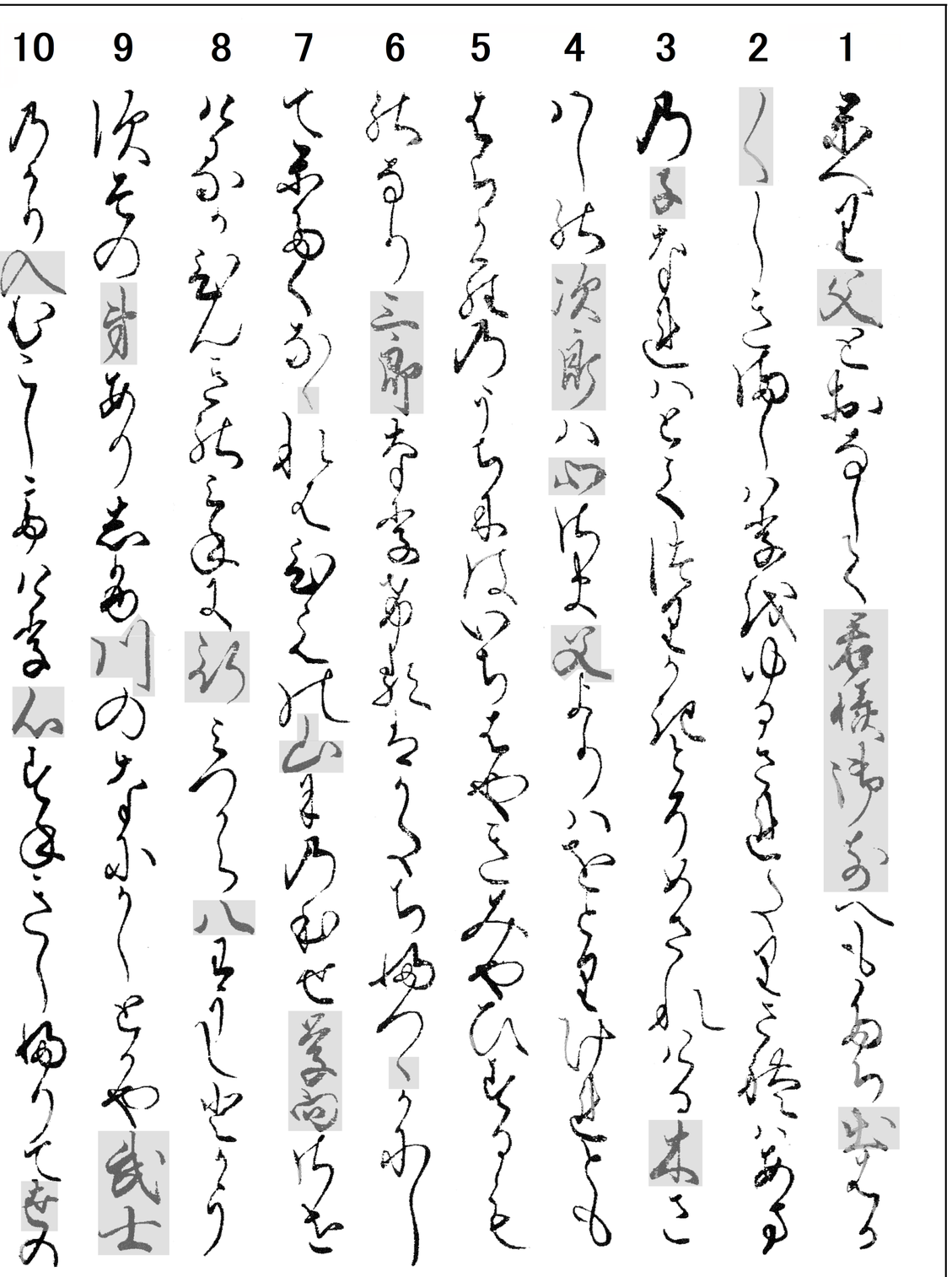
6 給ひけるさるへきいとなみもせてのりをすり
給ひける。さるべきいとなみ（営）もせで、のり（糊）をすり

7 ていちにうりけれは世の人御所かきのこねりと
ていち（市）にう（売）りければ、世の人御所がき（柿）のこねりと

8 なむ申ける子ともあまたもちたり太郎さね
なむ申（もうし）ける。子どもあまた（数多）も（持）ちたり。太郎さね

9 なりはあかしのうらにてまうけたる子なれはかのうらに住けり
なりはあかし（明石）のうら（浦）にてまう（設）けたる子なれば、かのうら（浦）に住けり。

10 はやうまたきにいと若き比よりひむひけしろくて京に
はや（早）うまだきに、いと若き比（ころ）よりびむひげ（鬢髭）しろ（白）くて、京に



1 かへり父とおなしく君様御前へもたち出はか
かへ（帰）り、父とおなじく君様御前へもた（立）ち出（いで）、はか

2 〳〵しきましはりをゆるされたりされはあま
〳〵（ばか）しきまじ（交）はりをゆる（許）されたり。されば、あま（海女）

3 の子なれはとてつりかきとそめされける木さ
の子なればとて、つりがき（釣柿）とぞめ（召）される。木ざ

4 はしの次郎は心さま父よりはをとりけれとも
はし（酬）の次郎は、心ざま父よりはをと（劣）りけれども、

4 はらからのうちにはいちはやきみやひするも
はらからのうち（内）にはいちはや（早）きみやび（雅）するも

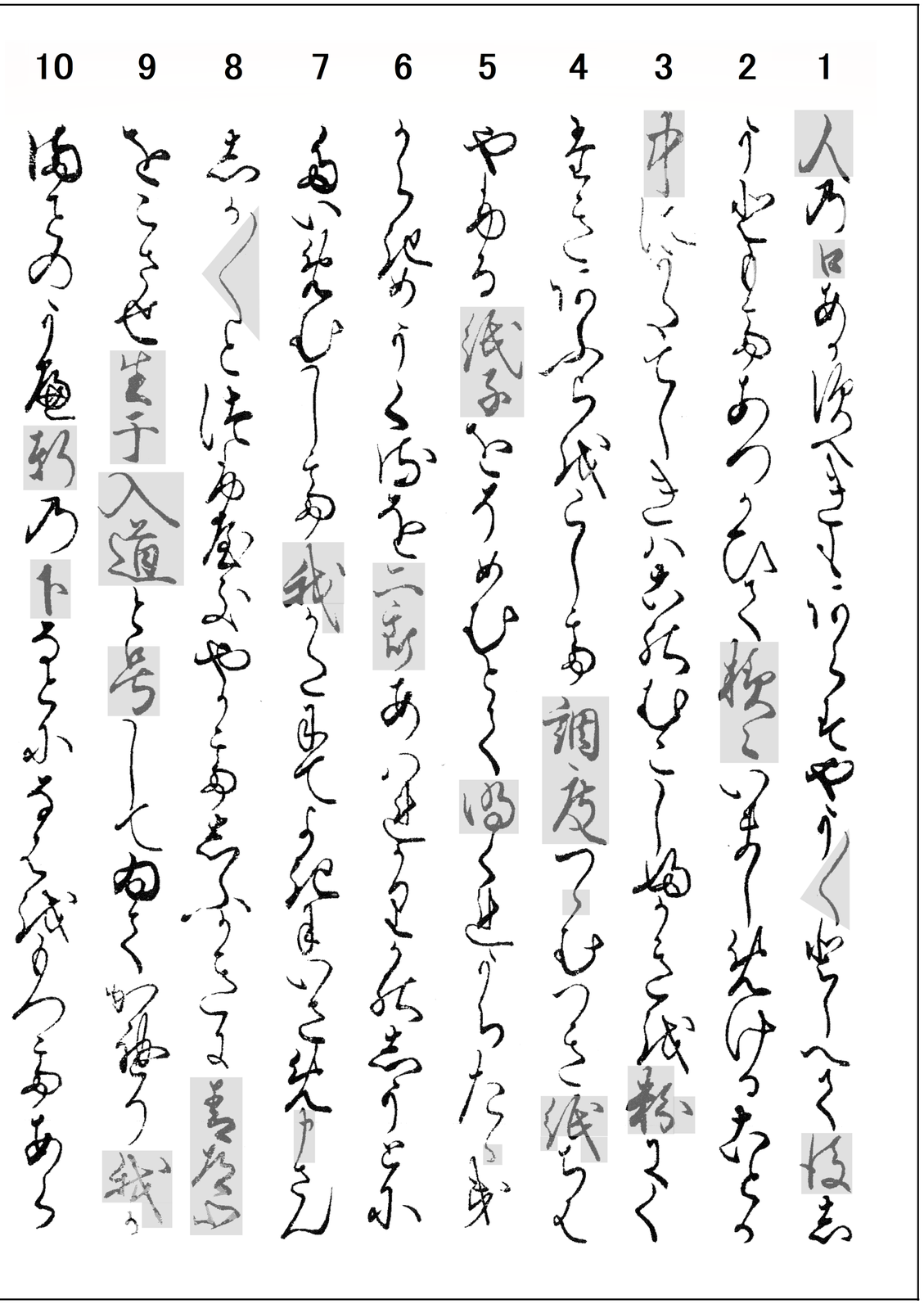
6 のなり三郎なりけるはかたちふつゝかにし
のなり。三郎なりけるは、かたち（形）ふつゝ（つ）かにし

7 てかたくなゝれはひえの山にのほせ学問させ
て、かたく（頑）なゝ（な）れば、ひえ（比叡）の山にのぼ（登）せ、学問させ

8 けるかひんきのみねに行みつから八わうしとかう
けるが、びんぎ（便宜）のみね（峰）に行（ゆき）、みづか（自）ら八わうじ（王子）とがう（号）

9 すその弟ありしふ川のなにかしとかや武士
す。その弟あり。しぶ（渋）川のなにがし（某）とかや、武士

10 のかり入むこしてけり心すねきしふりて世の
のがり（許）入むこ（婿）してけり。心、すねき（拗気）しぶりて、世の



人の口あかすべきもあらず。やう〳〵（やう）とし（年）へ（経）て後、し

1 人の口あかすへきもあらすやう〳〵としへて後し

うと（舅）もてあつか（扱）ひて、様々いまし（戒）めけることが

2 うともてあつかひて様々いましめけることか

中にうたてしきは、このむこ（婿）しぶがき（渋柿）を粉にく

3 中にうたてしきはこのむこしふかきを粉にく

だ（砕）き、あぶら（油）をこ（漉）して、調度つゝ（包）むつぎ（継）紙、ちは

4 たきあふらをこして調度つゝむつき紙ちは

やぶ（千早振）る紙子をそ（染）めむとて、明（あけ）くれ（暮）う（打）ちたゝ（た）き、

4 やふる紙子をそめむとて明くれうちたゝき

から（辛）きめ（目）う（受）くるを、二郎あはれがり、かのしうと（舅）に

6 からきめうくるを二郎あはれかりかのしうとに

たいめむ（対面）して、我（わが）かた（方）にてよきにいさめ申さん

7 たいめむして我かたにてよきにいさめ申さん

しか〴〵（じか）とつふやき、やがてしぶがき（渋柿）に青道心

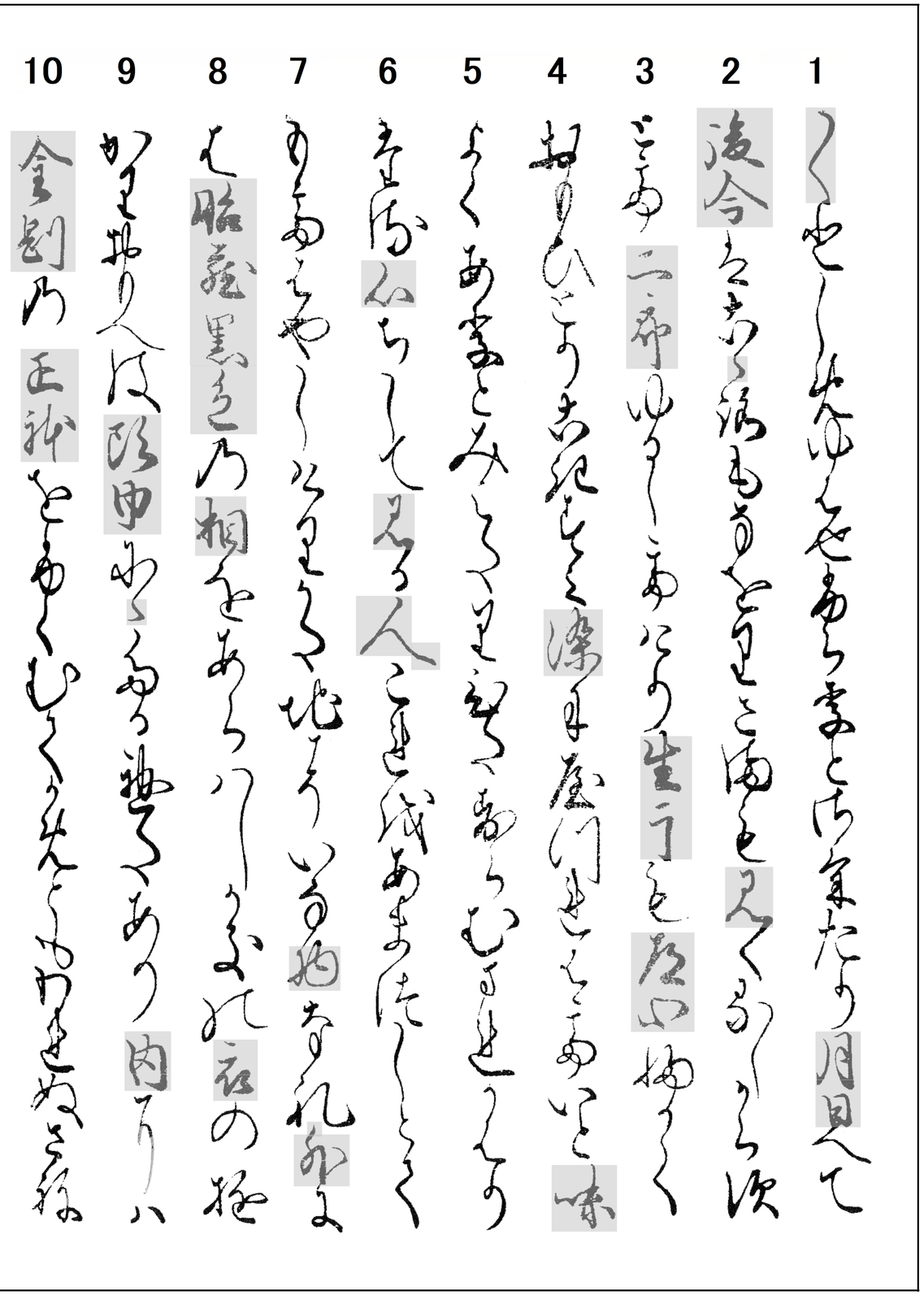
8 しか〳〵とつふやきやかてしふかきに青道心

を（起）こさせ、生干（なまび／なまぼし）入道と号してゐ（率）てかへ（帰）り、我が

9 をこさせ生干入道と号してゐてかへり我か

まこと（＊「窓」の誤りか）のうへ（上）、軒の下などになは（縄）をもつて、あら

10 まことのうへ軒の下なとになはをもつてあら



1 〳〵としめゆはせふらりとさけたり月日へて
2 後今はこゝろもなをりさまも見くるしからす
3 とて二郎ゆるしてけり生干も道心ふかく
4 おもひとりこきすみ染にやつれはていと味
4 よくありとみえたりひたすらむまれかはり
6 たる心ちして見る人これをあまつしとて
7 もてはやしけりかたちこそいな物なれ外に
8 は胎蔵黒色の相をあらはしかきの衣のゆ
9 かりおもへは頭巾にゝたるへたあり内には
10 金剛の正躰をふくむてかめともわれぬさね

〳〵（あら）としめゆ（結）はせ、ぶらりとさ（下）げたり。月日へ（経）て後、今はこゝろ（心）もなを（直）り、さまも見ぐる（苦）しからず

とて、二郎ゆる（許）してけり。生干（なまび／なまぼし）も道心ふか（深）く

おも（思）ひと（取）り、こ（濃）きすみ（墨）染（ぞめ）にやつれはて、いと味

よくありとみ（見）えたり。ひたすらむ（生）まれかはり

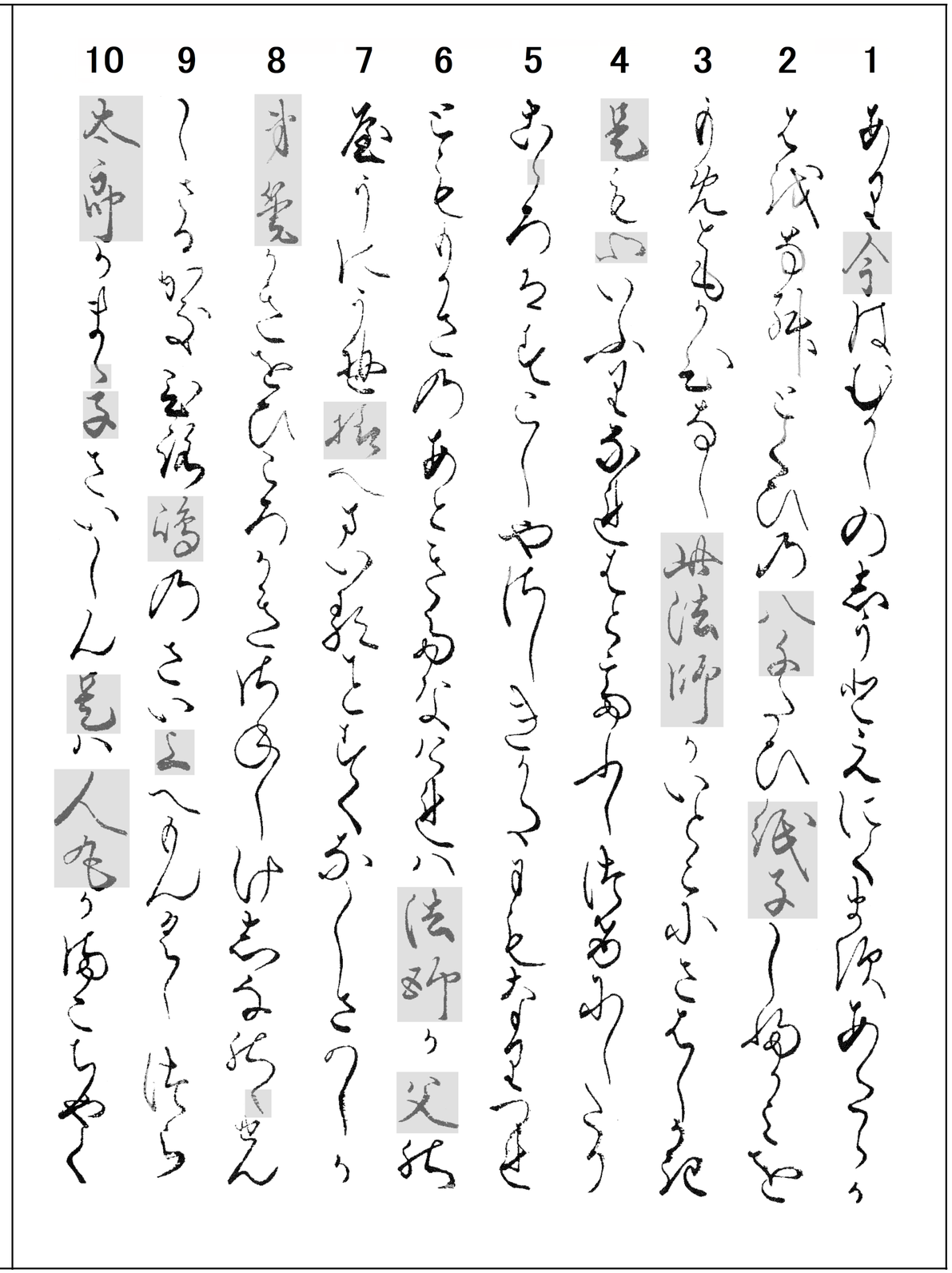
たる心ち（地）して、見る人これをあま（甘）つしとて

もてはやしけり。かたち（形）こそいな物なれ。外に

は胎蔵黒色の相をあらはし、かき（柿）の衣のゆ

かりおも（思）へば、頭巾にゝ（似）たるへた（蓆）あり。内には

金剛の正躰（＝体）をふく（含）むで、か（噛）めどもわ（割）れぬさね（実）



あり。今はむかし（昔）のしうと（舅）、えにく（憎）まず。あたらか

1 あり 今はむかしのしうとえにくますあたらか

は（皮）をなむと、くひ（悔）の八千たび、紙子しぶがみ（渋紙）を

2 はをなむとくひの八千たび紙子しぶかみを

も（揉）めどもかひ（甲斐）なし。此（この）法師がいとこ（従兄弟）にさはしがき（酬柿）、

3 もめともかひなし此法師かいとこにさはしかき

是（これ）も心いぶりなればとて、ふしづ（漬）けにしたり。

4 是も心いぶりなれはとてふしつけにしたり

こゝろ（心）はすこ（少）しやさしきかた（方）にもなりつれ

4 こゝろはすこしやさしきかたにもなりつれ

ども、もがさ（疱瘡）のあと（跡）きたなければ、法師が父の

6 ともかさのあときたなけれは法師か父の

やうに、うへ（上）様へまい（参）ることすくな（少）し。さはしが

7 やうにうへ様へまいることすくなしさはしか

弟筆がき（柿）、をひ（甥）ころがき（転柿）さねしげ、しなの（信濃）ゝ（の）ぜん

8 弟筆かきをひころかきさねしけしなのゝせん

じ（前司）さるがき（猿柿）、ひろ（広）嶋のさい上（＝西条）へもん（衛門）くし（串）つら、

9 しさるかきひろ嶋のさい上へもんくしつら

太郎がまゝ（継）子さいしん、是（これ）は人丸がまごちやく（孫嫡）

10 太郎かまゝ子さいしん是は人丸がまこちやく

1 しなりといふそのほかはみなたこくにあれは

2 もらしつ

1 しなりといふそのほかはみなたこくにあれは

し（子）なりといふ。その外はみな（皆）、たこく（他国）にあれば

2 もらしつ

も（漏）らしつ。

10 9 8 7 6 4 4 3